

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

観光現象への新たな視座＜共同研究：グローバル化時代における「観光化／脱 - 観光化」のダイナミズムに関する研究＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2023-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奈良, 雅史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000004

観光現象への新たな視座

奈良 雅史

観光現象の現代的状況をめぐる人類学的研究

現代社会について考えるうえで、観光は無視できないものとなっている。本共同研究が始まった2019年10月からまもなくして世界的に感染が拡大した新型コロナウイルス感染症は、そのことを如実に示すこととなった。構想段階において本共同研究では観光分野へのパンデミックの影響を想定していなかった。しかし、奇しくも以下で示すように本共同研究のテーマは、新型コロナウイルス感染症の影響をその射程に収めうるものとなっている。

本研究の目的は、①国内外の諸事例を踏まえ、ある対象が観光の文脈に包含されるプロセス（「観光化」）、および観光が縮小、停止、方向転換されるプロセス（「脱観光化」）、その双方の詳細を実証的に検討し、②グローバル化の議論を批判的に参照しつつ、人類学全体をみすえた新たな視座の構築を目指す、というものである（東 2020）。

本共同研究では3年半の期間中に16回の研究会を実施し、共同研究メンバー8名に加え、ゲスト講師6名が発表を行った。これらの研究会では、地域や学問領域に限定を設けず、国内外のさまざまな地域の事例を検討し、文化・社会人類学、観光学、社会学、民俗学などといった多様な分野の知見を活かして、学際的な議論を進めてきた。

議論を重ねるなかで、本共同研究の主要なテーマである「観光化」と「脱観光化」に関する考えもより深まっていくこととなった。当初、本共同研究ではこれらのプロセスを対極的に位置づけられる現象とみなしていた。しかし、さまざまな事例の検討を進めるなかで、共同研究メンバーのあいだでは、これらのプロセスを表裏一体で、ある観光現象に内包されるふたつの側面として捉える視座が形作られてきた。

本共同研究の成果として、論文集『ツーリズムの人類学—かわりゆく観光と社会のゆくえ』（仮）を出版する予定であり、現在、編集作業を進めている。以下では、本共同研究を通じて得られた知見の一部を紹介したい。

「観光化」と「脱観光化」のもつれ

本共同研究は、現代社会における観光をめぐる状況を「観光化」と「脱観光化」というふたつのプロセスから捉えようとするものである。前者は、従来、必ずしも観光資源とはみなされてこなかった対象にまで「観光のまなざし」（アーリ／

ラスン 2014）が向けられ、観光の文脈に含まれるようになるプロセスである。戦争や自然災害に関わる遺産を観光対象とみなすダークツーリズム、アニメや映画の舞台を観光対象とみなすコンテンツツーリズムなど、さまざまな観光形態が現れてきたことが、「観光化」のプロセスとして位置づけられる。

こうした観光化は一見すると不可逆的に進展するプロセスのようにみえる。しかし、観光化は、増加する観光客数が地域社会や自然環境の許容度を超えてしまうオーバーツーリズムの現象を引き起こして見直しを求められたり、ここ3年間にわたしたちが経験してきたように新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって停止されてしまったりすることもある。こうした「観光化」に伴って生じる葛藤や軋轢を対象化するために、本共同研究では「脱観光化」を独自の概念として導入した。「脱観光化」は観光の縮小、停止、方向転換を含む現象を包括的に表す概念として位置づけられる。

「観光化」と「脱観光化」は一見すると正反対のプロセスのようにみえる。しかし、上述のように、本共同研究では、これらのプロセスが切り離せない関係にある諸相を民族誌的に描き出してきた。たとえば、筆者の調査地である中国雲南省においては2000年代以降それまで観光対象とみなされてこなかった回族とよばれるイスラーム系少数民族の文化が、政府主導の観光開発により「観光化」されてきた。しかし、回族文化の観光化は、現地の回族のあいだでは、改革開放以降に展開したイスラーム復興の文脈で捉えられ、実践されている。回族集住地域の主要な観光スポットであるモスクでは、観光開発に伴い増加した観光客に対応するために、ボランティアガイドが組織された。この出来事は、一見すると回族文化の観光化に伴う現象のようにみえる。しかし、ボランティアガイドたちは、単に観光客をもてなすだけではない。彼／彼女らは漢族をはじめとする非ムスリム観光客への宣教を兼ねて、ボランティアガイドを実践している。宗教活動に対する政府からの規制が厳しい現代中国において、観光化は宗教活動を活発化させる契機のひとつともなっているのだ。その意味で、回族文化の「観光化」は、そのプロセスをイスラーム復興の文脈へとずらしていく方向転換としての「脱観光化」と不可分に進展しているといえる。この事例が示唆するように、観光をめぐる諸現象は、「観光化」と「脱観光化」という一見すると相反するプロセスのもつれとして理解する必要があるのだ。

奈良 雅史 (なら まさし)

国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授。専門は文化人類学、中国地域研究、イスラーム地域研究。著書に『現代中国の（イスラーム運動）—生きにくさを生きる回族の民族誌』（風響社 2016年）、編著書に『多元化する台湾のムスリム・コミュニティ』（上智大学イスラーム研究センター 2021年）などがある。



観光客に水やお菓子を提供するモスクのボランティアガイドたち（2016年9月、中国雲南省、奈良雅史撮影）

観光における偶発的な出会いがもたらすもの

観光をめぐる諸現象を「観光化」と「脱観光化」という視点から捉え直すことは、現代社会を理解するうえでどのような可能性を開くだろうか。東浩紀は、観光客が観光に出かけ、観光地でその住民や他の観光客などと偶発的に出会い、交流することにより、イデオロギーを共有しないアクターのあいだに結果として連帯のようにみえるものが生み出される可能性について論じている。さらに東浩紀はこの不確実な連帯のようなものにグローバリズムや国民国家への抵抗の可能性をみる（東 2017）。

本共同研究で試みてきたように、観光現象における「観光化」と「脱観光化」というふたつのプロセスが複雑に絡まり合う諸相を明らかにすることは、こうした不確実で偶発的な連帯のようなもののあり方を理解することにもつながる。本共同研究の代表である東賢太郎（名古屋大学）は、ビーチリゾートとして世界的に有名なフィリピン・ボラカイ島の事例から、観光地における多様なアクターのあいだに生み出される連帯の契機について論じる。ボラカイ島では環境汚染によ

って観光活動が制限されてきた。この観光が縮小するプロセスにおいて、ホスト／ゲスト、雇用者／従業員、内部者／外部者といった対極的な関係にある二者間関係を越えて、在りし日の美しいビーチを偲んでビーチクリーニングが行われるようになったという。ここにみられる関係性は偶発的で、脆弱なものにすぎない。しかし、環境保護のために観光行動を制限しながら（のちに一時的に閉鎖）、観光客を受け入れてきたという意味で「観光化」と「脱観光化」が同時に進展するボラカイ島の現状を変えていく可能性を内包するものであるともいえるだろう。

このように本共同研究では、「観光化」と「脱観光化」というふたつのプロセスから観光現象を捉えるとともに、そこに看取される新たな連帯の可能性とそのあり方を明らかにした。

引用文献

- 東賢太郎 2020「観光を再考する、観光の人類学を再構想する」『民博通信 Online』1: 16-17。
東浩紀 2017『ゲンロン0—観光客の哲学』東京：ゲンロン。
アーリ、J./J. ラースン 2014『観光のまなざし』（増補改訂版 叢書・ウニベルシタス 1014）加太宏邦訳、東京：法政大学出版局。